

祝 八起き歌 歌

多谷昇太

梓弓すゑは代々名は末代いはおくだけで砂となる
まで

八百万のをとこをうなを背負ふとの気概もちつつ
文すとみなせ

みなせ川ふもとに散りし川石はうき世きざみし流
紋石

丹沢の三ノ塔こそかなしけれ西に富士山身に思ふ
どち

八十(やそ)とうはいかなる数のしるしにや人なら
大人みなせも元服

朝霧の思ひまどふるいまなれど七たび転びて八た
び起きぬ

人とうは八ひろがりの裾野なすあらぬ我なら文も
てせばや

剣太刀名と身代を人はなす八十たび重ねしこや祝
(ゆ) つみなせ



夏の丹沢 (PHOTO ACより借用)

「孟蘭盆（うらぼんえ）」

多谷 昇太

転居先はどこにてもよし澱ゆ出でむ方々めぐるが
流人ごとしも

こは何ぞ空き部屋尽くしの団地なり雇用促進住宅
とか、花冷えす

愛しきは中庭遊ぶ乙女子らすさぶすまひに負けじ
とあらな

引つ越せどなほ追い來たるストーカー誰か信ずる
17年つくを

しゑやしゑ、追ひ続けなほつきまくるクズうから、
しゑや、ただ、しゑや

この団地夜はあやふしヤクザ住む心得つともタバ
コがり行く

この団地外つ国人（とつくにびと）らの数多住む日
頃の憂さをタブラで晴らすか

目をやれば鉢植え苗木のそよぐなり甲斐なきわれ
に託すが痛し

楽しみは8月4日の花火なり県内一とか我が憂さ
晴らせ

勇壯の景色なるかな五階より丹沢山ろく野分行く
見ゆ

ちはやぶる神の絵筆の冴へるなり丹沢山塊墨絵と
浮かぶ

孟蘭盆会さかさづりなるこの身をば供養せなむや
つれなき世人